

よどじん



真冬の寒さが続く2月上旬。新高にある子ども・子育てプラザの一室から、寒さに負けない子どもたちのはじける声が聞こえてくる。子どもたちが思い思いに遊び、保護者たちが話に花を咲かせる「つどいの広場」の一角に、子どもたちにも負けないほど楽しそうに笑う人がある。全力で子どもと一緒に遊びながらも、隣で見守るママの話にしっかりと耳を傾け、言葉をかける助産師の姿。



今月のよどじんは、助産師

いわしま きくみ 岩島 貴久美さん

助産師ってどんな仕事？

出産のサポートだけでなく、妊娠中の健診をはじめ出産後の体調や育児のケアなど、ママと赤ちゃん、そしてその家族を長きにわたって支える仕事です。助産院でのケアや、お宅に訪問して行うケアがあります。

助産師免許を取るには、看護師免許が必要です。基本的に産科に勤務しますが、病院等では看護師の仕事も兼務することもあります。

原点は母の姿

岩島さんが助産師を志したのは、看護師として病院に勤務し7年が経とうとしていたころ。ステップアップを考えていたときに、頭に浮かんだのは母の顔だった。

岩島さんの母は、決して怒らず、子どもの話をよく聞く人だったという。岩島さん自身も、母を慕う親戚の子や近所の子どもたちと一緒に育った。「子どもをかわいと思う気持ちは、母からもらったんです」と彼女は話す。「子どもに関わることを究めよう」と、働きながら助産師学校に通い、資格を取った。

生きるって、なんだろう？

10年ほどお産の現場に立ち、やがて看護師長に昇任した岩島さんは、神戸の病院に異動となる。病棟を取りしきりながらお産に立ち会う、という目まぐるしい毎を送り始めた。

助産師としてたくさんの命の誕生に立ち会っていると、不思議に思うことがあった。体が小さく生まれてもすくすくと育つ赤ちゃんもいれば、大きく生まれてもわずかな時間で力尽きてしまう赤ちゃんもいる。「生きるって、なんだろう?」。科学的に表すことのできない、「生きる力」のようなものがある気がした。お産は感動的だけど、それだけじゃない。もっと知りたい、そう思った矢先。

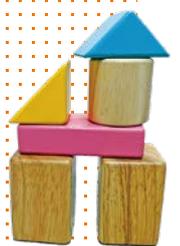
大きな地震が神戸のまちを襲った。

ひとは“力”を持っている

自身も病院スタッフも患者も、全員が“被災者”になった。混乱の中、病院にはさまざまな人が運ばれてくる。傷ついた命や今にも消えそうな命、そしておなかに宿った小さな命もあった。

神戸で、がむしゃらに突っ走った日々。自然の前での無力さを何度も思い知らされた。一方で、生まれてくる子どもや生きようとする人々から、命の強さをたくさん教わった。人には、生きる力や治す力などさまざまな力がある。「これからは、人のそんな力を引き出す活動がしたい」。彼女の助産師としての目標が、神戸のまちで芽吹いた。

喜びも苦しみも
いつしよに



◀「もう本当に赤ちゃんの笑顔にメロメロで笑ってます」と岩島さんは笑う



▲手術室や病棟での看護師経験が、コミュニケーションに活かせることも多い

▼子どもは“人を笑顔にさせる力”を持っている



▲「うまれたときから何キロ増えたかな？」

もっとそばにいたい

その後は、管理職として近畿管内の病院を転々とした。産科のない病院へ異動になると、とたんに赤ちゃんが恋しくなった。看護師長として病棟に立つ一方で、助産師として「子どもたちと関わりたい」という思いが日を追うごとに大きくなっていくのを感じていた。悩んだ末に、病院を退職。助産院の開業を決めた。

淀川区には若い夫婦が多く暮らし、出生数も多い。地域に根を張って、子どもや家族と向き合うのにはぴったりの場所だ。まずは訪問ケア専門の助産院として最初の一步を踏み出し、目の前の赤ちゃんやママ、パパの言葉に耳を傾け、寄り添うことを心がけた。

顔を合わせて会話する

助産院としての個別的な関わりだけでなく、地域のママやパパを広くサポートし

たいと考えて、3年ほど前にはNPO法人「このとりunit」も立ち上げた。新型コロナウイルスの影響は、子育てを始めたばかりの家庭にも例外なく降りかかっているはず。交流もなく、孤独の中での育児はどんなに不安だろう。迷いもあったが、ママやパパの気持ちを少しでも軽くできればと、できる限りの感染対策を講じて訪問や教室などの活動を続けた。誰かと共有したかった喜びや不安という感情が、堰を切ったようにあふれ出す彼女らを見て、人との交流の大切さを改めて実感した。「交流を通して人とつながることが、子育ての力になれば」と、彼女は言う。

毎日が勉強です!

地域の子育てを支えるかたわら、助産師学校や看護学校で学生の指導にもあたっている。「私も知識をアップデートできるし、お産にも立ち会える。同じお産は二度とないし、同じやり方の子育ても

ない。経験を積むしかないなので、こうやって勉強させてもらって本当に嬉しいんです」と楽しそうに笑う。

キーワードは“笑顔”

助産師の仕事は天職だと思いますか?と問いかけてみる。「天職なんて言っていないのかわからないけど……」とはにかみながら、「赤ちゃんに勉強させてもらって、笑顔に癒してもらって。もちろん、お産や子育ては嬉しいこと楽しいことばかりではないけど、こうやって楽しく仕事をさせてもらって、助産師になってよかったと思っています」と、力強いまなざしでうなずいた。

どんなときも笑顔を決やらず、人の心に寄り添い、学び続けようとする姿勢が、彼女の芯の強さにつながっているのだと感じた。子どもたちと家族、そして地域の“笑顔”のため、彼女はこれからも、小さな命に寄り添い続ける。



区役所でも! 保健師に子どもの相談ができます

お子さんのことや育児について気になること、心配に思っていることなど、お住まいの地域の担当保健師にお気軽にご相談ください。窓口では、身長や体重の計測、ハーフバースデーの写真撮影もできます。



問合せ 保健福祉課(健康相談) 2階21番 ☎6308-9968

一緒に考えて
いきましょうね!